

ふれることに関する教育人間学的考察

—竹内敏晴の思想を手がかりに—

岸 本 祐 太

はじめに

ふれることについて考察するに先立ち「ふれあい」について取り上げる。このふれあいという言葉は、福祉や教育にまつわる様々な言説や評論、教育機関における標語において多く登場する。例としては、「親子のふれあい」、「教師と生徒のふれあい」のように人々の間での現象を表すこともあれば、「犬とのふれあい」、「ふれあい牧場」などのように人と人以外の生き物との間での現象を表すこともある。一方で、「ガラスとのふれあい」や「コンクリートとのふれあい」という用例に違和感を覚えるように、ふれあいの意味には、人と人、あるいは人と人以外の生き物との間における相互間の情緒的な交流、それに伴った親しみの感覚が含意されている。『日本国語大辞典』においては「①互いに触れること②心を通わせあうこと。親しくつき合うこと」という定義が見られる。

哲学者の坂部恵（以下坂部とする）は、ふれるという経験について「「ふれる」ことはつねに「ふれ合う」こと、いうなれば、惰性化した日常の境域の侵犯であり、能動－受動、内－外、自－他の区別を超えた原初の経験である」（坂部 1983:4-5）と述べている。そして、その具体的な例として、「赤子の心臓の鼓動を感じることに於いて、端的に一つのいのちのうちにふれる」（坂部 1983:5）という赤ちゃんの胸にふれるという場面を挙げている。ここでは、実際に手でもって赤ちゃんの胸にふれている訳だが、ふれるという経験は単に肌と肌が重ね合わるだけでは成立し得ない。その理由としては、坂部が「愛する人の体にふれることと、単にたとえば電車のなかで痴漢が見ず知らずの異性のからだにさわることとは、いうまでもなく同じ位相における体験ないし行動ではない」（坂部 1983:27）と指摘するように、「ふれる」と「さわる」とではその経験の位相が異なっているからである。坂部は両者の違いについて以下のように述べている。

ふれるという体験にある相互嵌入の契機、ふれることは直ちにふれ合うことに通じるという相互性の契機、あるいはまたふれるということが、いわば自己を超えてあふれ出て、他者のいのちにふれ合い、参入するという契機が、さわるということの場合には抜け落ちて、ここでは内－外、自－他、受動－能動、一言でいってさわるものとさわられるものの区別がはっきりしてくるのである。（坂部 1983:27）

坂部は、ふれる、ふれ合うという経験の特徴について「相互嵌入」と「相互性」を挙げている。恋人や友人などの親しい人物とのふれあいの場面を思い起こしてみるならば、それらの特徴は一見自明であるように感じられる。しかし、私たちがふれあいと呼んでいる現象を丁寧に振り返ってみるとその成立の困難さが浮かび上がってくる。その具体的な例として、哲学者の鷺田清一（以下、鷺田とする）がかつての勤務先での授業で出会ったという学生のレポート答案を手がかりに見てみたい。

その答えは「大好きだ攻撃」というタイトルの回答者がつき合っていた恋人と別れた経緯について述べられたものである。内容を要約すると、回答者はつき合っていない恋人から会うたびに「好きだ」という言葉を投げかけられる。当初は悪い気もしなかったが、じぶんの気持ちが明確でないということを告げても、相手はその反応すらも自分への好意の一つであると確信してしまう。回答者は、何度もくりかえし耳元で囁かれる好意の言葉に疲れてとうとう黙り込んでしまうが、その沈黙すらも「照れ屋さん」という解釈を被ることになってしまったという。(鷺田 1996:3-6)

鷺田が挙げる例において生じているのは、一方はふれている、ふれあっているという確かな実感を抱いているのに対して、他方は明らかにふれていない、ふれあっていないと思っているという事態である。ここから明らかになるのは、人と人の間においてふれあいが生じることの困難さである。演出家であり、「からだ」という視座から演劇教室や障害者療育などに携わった竹内敏晴（以下竹内とする）は、彼の代表的著作の『ことばが劈かれるとき』の文庫版あとがきの中で、「今になってみると、私の生を貫いて来たたった一つの願いは、ただ『じかに、そして深く、人とふれあうこと』と云えば尽きるのであろう」（竹内 1988:298）と語っている。その一方で、彼は「相手に「ふれる」と願う行為の最も大きな盲点は、実は自分の思い込みや習慣の内に他人を取り込もうとしているのだと気づくことが極めて難しいことにある」（竹内 2013b:128）と述べ、他者にふれたいという思いが持つ盲点について指摘する。先ほど挙げた大好きだ攻撃の話は、まさに自分の思い込みによって他者を取り込んでしまっている事例だと言えるだろう。

自分の中にふれたいという思いやふれているという実感が強ければ強いほど、相手を自分の思い込みや習慣の内に他者を取り込もうとしているという一面が見落とされてしまう。しかし、思い込みや習慣を完全に取り去らって他者と関わることは原理的に不可能である。さらに、竹内は、他者について「「他者」は完結し、凍結して入りこむことのできぬ世界であり、不可触の存在である」（竹内 2013a:130）とも述べている。

では、このような自己と他者において避けられないズレや隔たりを踏まえて、ふれるという経験はいかなる様相を呈するのだろうか。小論では、「不可触の存在である他者」にふれていくことの意味について主に竹内の思想を手掛かりに考察を行う。

1 ふれられないということ

本節ではまず、竹内自身の体験や彼が主宰していた演劇教室におけるある少女との出会いの場面をもとに、他者にふれられないという現象について考察を行う。先にも挙げたように、竹内は自身の生を貫く願いとして、「じかに、深く、人とふれあうこと」を挙げていた。同様に竹内は、演劇という仕事に携わるようになったきっかけについても「芝居の仕事に入ったのは、いわば「他者」との真のふれあいを求めて共同の創造に立ちあうことを願ったのだった」（竹内 2013a:49）と述べている。これらのことから、竹内にとって他者とのふれあいは自明の出来事ではなかったことが分かる。その理由として、彼には幼少期からの聴覚言語障害が存在したことが挙げられる。竹内は、自身の聴覚言語障害について「わたしは聴覚言語障害者で、ずっとことばがうまくしゃべれなかったから、他人とのコミュニケーションが断たれているという自覚が強かった。隔てられた壁を越えてなんとか他人へ届けたい、他人にじかにふれたいという切望が身の内に充満していた」（竹内 2013b:129）と

語っている。一方で、竹内は、自身の主宰する演劇教室での参加者をみて「一見ことばに何のさしさわりもないように聞こえる人が実はいろいろな形でことばを歪ませている。そしてその大きな理由は、他者にふれることを恐れ、逃げていることらしいとわかってきた」（竹内 2013b:92）と述べている。これは、他者にふれられないという出来事が竹内個人のものではないということを示している。

では、ふれるという経験から疎外されるとは一体どのような状態なのだろうか。その具体的なあり方に迫るため、竹内が自身の主宰する演劇教室で出会ったSという少女の例を挙げる。竹内によるとSは「[もの]や[ひと]にちゃんとふれられない」（竹内 2013a:138）状態にあったという。

Sはまさに「ほんとうにふれる」ことができなくなっていた。レッスンで人に話しかけるのも、想像上の水を飲んだりものを持ったりするのも、さらには体験でひとのからだにふれてゆくまで、みな、からだの内に感じ動くものがない。それなら怖がって手を出さなくなってしまうのかというと、そうではない（ここは後に私が多少接触してゆく自閉傾向と違うところのように思うが）。むしろ、意志によってちゃんと正確に演技し行動するのだが、心がどこかへ逃げ出している、どこか違うところからそれを眺めている、といった感じなのである。（竹内 2013a:140）

上記の「からだの内に感じ動くもの」とは、竹内が「内発性」と称するものであり、このようなあり方について日本語における表現の差異に言及しながら以下のように述べている。

「見る」に対して「見える」ということばがある。「見る」は「目をやる」とも言うが、これに対して「目が行く」ということばがある。さらに「目が走る」とさえ言う。「見る」「目をやる」は意識的な行為だが「見える」は無意識とは言い切れぬまでも受け身である。「目が行く」「目が走る」になれば、意識が働く前に、さっからだか動いているという事態をまことにみごとに表現している。（竹内 2013a:137）

ここでは、意識的に行う行為と「からだの内に感じ動くもの」によって突き動かされる行為は異なっており、その違いが日本語の動詞における表現の差異に込められていることが示される。竹内は「ふれる」という経験についても同様であるとし、「私が机を見たりふれたりするとき、少なくともその瞬間、私は自己に向かう意識が消えなければ、見ることもふれることもできない」（竹内 2013a:93）とその成立要件について言及している。また別の表現では、「ふれるとは、ものと「交流すること」と言ったのではあいまいになるのではないか。ものに吸いとられることなのだ」（竹内 2013a:93）と語っている。つまり、ふれるという経験は、意識するよりも先にからだか動いてしまっているような状態であると言えるだろう。

そして、竹内自身もSという少女と同じくふれるという経験から疎外されていたことが、彼が演劇の仕事において他者との関係にて苦しんだ「人が目の前で聞いているけれども、自分はどこか別のところに行っている、「ざまあみろ、ほんとのオレはこんなところにいやしねえんだ」とせせら笑っている。これは後で診断されてしまったように離人症だったのだろう¹⁾」（竹内 2009:86）という感覚から読み取ることができる。

先の少女の例と照らし合わせてみると、竹内もSも目の前で起きている状況をどこか遠くから眺

めているという感覚を抱えていることが分かる。このような感覚は、多くの人が一度は経験したことがあるだろう。仕事で否応なく上司や顧客にお世辞を使わなければならない場面や、あまり親しくない知人と思ってもない言葉を交わす場面などでは、心ここにあらずというような気持ちになる。しかし、それが常態化することによって離人症のような症状を呈し、ふれるという経験から常に疎外されてしまうのだと考えられる。竹内は、先に挙げた自分が別のところにいるような感覚について「ことばが、私自身と、どこかで乖離していること、だからことばを生みだしている私が、どこか、仮設のもの、構築されたものであって、「自」ではあり切れないという感じとして、返ってくる」(竹内 2013a:69) と述べている。このような感覚から抜け出すきっかけとなったのが、次節において取り上げる竹内が「ことばが劈かれる」と称する体験である。

2 竹内敏晴の「ことばが劈かれる」という体験

竹内は「ことばが劈かれる」という自身の生に訪れた転機について、「存在がじかに現われた、生の相手に触れた、まざまざと他者に出会った」(竹内 2013a:249)、「閉じ込められていたガラスの壁がふっとんだ」(竹内 2009:84) など様々な表現をしている。この閉じ込められていたガラスの壁という感覚について竹内は、「以前の私は、話している相手との間に大きなガラスの壁があって、ちょうど放送局のモニタールームに入っているみたいに、相手の姿は見えるけれども、二人はふれることができないという感じだった」(竹内 2013a:249) と説明している。それは、「ことばも聞こえて意味もよくわかりますが、声そのものをじかに受け止めているという実感はありません」(竹内 2013a:249) という彼の表現から読み取れるように、目の前にいるはずの他者がガラスの壁のようなもので遮られているという疎隔感であった。このような感覚から脱するきっかけとなったことばが劈かれるという体験は、竹内が目の前に紙を置き、声によってそれを破るという発生訓練を何時間もしているときにもたらされる。(竹内 2009:87) 以下は、その具体的な叙述である。

突然ピーンと、出たことのない音が鋭く頭蓋骨を響きわたって、天井へ突き抜けていったのです。声とからだが一つになり、からだ全体が音の柱になった、と言えればいいか。何かがいっぺんに変わった。からだ全体—ということは、個体としての私と世界との関係の仕方ぜんぶが、変わってしまったのです。(竹内 2013a:248)

上に引用した内容を踏まえるならば、「ことばが劈かれる」という体験は、大きく分けて二つの変化を竹内にもたらしたことが明らかとなる。一つ目は、竹内自身の「からだ」において生じた変化であり、二つ目は実在感を伴った「他者」が出現したという自他関係における変化である。竹内自身の「からだ」において生じた変化について、彼はその体験を振り返りつつ「劈かれたのは、今気がついてみれば、「ことば」＝「声」ではなかった。外の風に吹きさらされて立ったのは「からだ」、声を、叫びを発出する基盤、ことばを生み出す源のからだである」(竹内 2009:84) と語っている。

ことばが劈かれるという体験によって竹内は情動を伴った「話しことば」に目覚めることになる。竹内は、ことばの持つ力に着目し「制度としての世間のことば」と「話しことば」を峻別している。前者は、「他人と距離をおき、自分が傷つかないようにかくすためのことば」、「自分を誇示するため

に装い、飾り、防衛のためのことば」(竹内 2009:117)である。その一方で、後者は「話しことばはまず、他者に対する「働きかけ」」(竹内 2013b:194)であり、以下のような特徴を持つ。

文言としての音の正確さなどふっとばして、いきなり耳を一古人は言ったが、わたしにとってはむしろ「からだ」を一打ち、はらわたにしみてくる「ことば」がある。そのわずかな幾言かが、ある場合にはむしろその音調が、わたしにとって「話しことば」であり、むしろ「その人」であり、「いのち」が行き交うことだった。(竹内 1999:86)

以上の竹内の分類を踏まえるならば、制度としての世間のことばには、他者にふれるという経験から身を退くという性質があり、話しことばにはありありと他者にふれていこうとする志向性があることが明らかとなる。では、他者にふれるための話しことばは、どのような条件下において発せられるのだろうか。竹内は、自身のレッスンを振り返る中で、他者に呼びかけたいとを感じる理由として「わたしが相手に働きかけるのは、根源的には、相手のからだと呼んでいるからそこに行くのだ」(竹内 2013b:131)と述べている。ここまで考察してきた竹内の「ことばが劈かれる」という体験は、他者のからだから発せられている呼びかけへの気づきの体験であると言えるだろう。竹内は、他者からの呼びかけに応えるからだを「共生態としてのからだ」と形容している。次節では、他者にふれていくために必要となる共生態という概念の具体的なあり方について考察を行う。

3 ふれることの要件としての共生態としてのからだ

竹内は、「ことばが劈かれる」という体験の後に訪れた自身に生じた変化について、共生態としてのからだという独自の概念によって説明をしている。竹内は、共生態としてのからだについて「それは固定化した「肉体」ではない。「見えないからだ」。動いている「いのち」——原義に従えば「い」は息、「ち」は勢いだから「息の勢い」——が「あちら」とひびきあい、この場が生きて動く。²⁾(竹内 2009:101)と定義している。また別の表現では、「やさしく言いかえれば、「ひびきあうからだ」であり「応えあうからだ」」(竹内 2009:107)であるとも述べている。

では、共生態としてのからだにおける他者とのひびきあいとは具体的にどのような出来事なのだろうか。それは、竹内が過去に参加してきた様々なワークショップや彼が主宰する演劇教室での参加者とのやり取りの場面から見て取ることができる。竹内は、そのような場面にて他者のからだを見つめることや真似をすることを通じて、その当人のからだに志向するものを知覚することができた。以下は、竹内によるその過程の説明である。

相対する場合に限らず、ある姿勢、ある行為をする人を見つめていると、そのからの動きが、すっとわたしのからだに移ってくる。共生態というほかないような共振である。その人の意志していることではなく、からだにどの方向へ動こうとしているか、志向性というべきものが、わたしのからだに移って、というより生まれてくる。わたしのからだにきしみ、ゆがむ。身を守ろうとしているか、出てゆこうとしているか、その二方向がどのようによじれながらひしめきあっているか、未来へ向かって身構え動きかけているからだ(実存と呼んでもよい)の方向

が、わたしのからだの身構えを押しつけて抵抗感をもって動く。だからこそ無自覚な当人より明確に、わたしに知覚されてくるのだろう。(竹内 2009:104)

このような共生態というあり方の例として、竹内がかつて出会ったある会合でのある女性との出会いの場面が挙げられる。以下にその一連の出来事の要約を示す。竹内は、その女性が自己紹介の場面で苦しそうに声が引かかっていることが気にかかったという。その後、あるワークが終了し参加者がお互いに相手への感想を言い合う場面で、竹内は女性の話し方の特徴を指摘したところ他の参加者から女性の器質的な障害を配慮しない発言について注意を受ける。しかし、女性は竹内ではなく注意を行った参加者の行為に激怒する。その後、竹内は自らの配慮の欠ける物言いを悔いるが、それでも腑に落ちない違和感が残り女性の声のひっきりや喉の詰まり方を一人で再現する。そして、最終日に再び相手に感想を述べる場面において、女性の話し方の真似をして見せ以下のような感じを抱いたと告げたという。(竹内 2013b:212-218)

私のからだの内に動いてくるのは、(障害に抗って一所懸命語りだそうとするエネルギーではなく)ほんとうはなんにもしたくない、動きたくないのに、ただ意志だけで頭を上げ、意志だけで口を開いてしゃべろうとする苦しさである、と言った。(竹内 2013b:216)

竹内によるからだの動きの模倣を目の当たりにし、その女性は、実は今まで小児麻痺に罹ったことはないが、小児麻痺の後遺症と判断するしかなく医者もそのように言っていたためにこれまでこのように言ってきたことを告げる。(竹内 2013b:216-217) その数年後、女性は、竹内に電話連絡をとり、「数年前を思い起こすことがむづかしいほど、なめらかな語り口で、かの女は、今、看護婦の資格を取るために勉強している」(竹内 2013b:218) という旨を語った。

ここで挙げた例で生じている他者のからだ志向しているものへの共鳴、共振こそが、共生態による他者からの呼びかけに応答するというあり方である。仮に、上に挙げた女性を小児麻痺という診断名で捉えてしまっていたとすると、当人のからだの動きや絞り出すような声を単に器質的な障害のせいにしてしまっていたら。竹内は、「人はからだ全体で表現し、からだ全体で話しかけている。言いかえれば全身を他者に差し出しているのだ。問題はそれを受け取る力があるかどうかだ」(竹内 2013b:197) と語っている。この竹内の考えを踏まえると、共生態とは、他者のからだによって自己へと差し向けられた語りに、自らもまたからだによって聴き入ることであると考えられる。

ここまで述べてきた共生態というあり方が、竹内という個人に限られた経験でないことは、中井久夫(以下、中井とする)が往診の際に出会った不眠症の少女とのやり取りの場面において示されている。中井はその少女の脈を取っている際に、自身の身体に生じた変化について「身体水準での「チューニング・イン」が起こりつつあった。(中略) ついに彼女の脈と私の脈は同期してしまい、私の脈も一分間一二〇に達した」(中井 1995:18) と述べており、さらにその時の感覚について「すべてが高速写真のようにゆっくりし、すべての感覚が開かれ、意識が明晰になった。これはおそらく少女が日頃体験しているものに他ならないものであった」(中井 1995:19) であったとしている。その後、中井は時計の秒針の音が毎分一二〇であることに気付き、その時計を止めることで少女の速脈もそれに同期していた自分の脈も落ち着きを取り戻したという。(中井 1995:20)

鷺田は、その著書の中で先の中井の例を取り上げ、そこには二重の同調性があると指摘する。こ

の二つの同調性とは、「環境に対して剥きだしになった少女の存在の、環境への過剰な同調と、その少女の身体への中井久夫の身体の正確な同調」(鷺田 1999:173)であり、「生存のおそろしいまでに深い同調ないしは共鳴」(鷺田 1999:173)である。中井の例は、共生態が他者の経験している世界へと限りなく接近を果たす可能性と危険性を表す例である。次節では、ここまで考察してきた共生態というあり方を踏まえつつ、竹内がふれるという経験をいかなる視座から捉えているかを明らかにし、「じか」というあり方について考察を行う。

4 竹内敏晴におけるふれる観の特質

竹内は、ふれるという経験について「「ふれる」とは距離がなくなることだ」(竹内 2013b:131)と定義づけ、その特徴として「子どもでも病むものでも同じだが、「じかにふれる」体験のもとにあるものには、距離をおき相手を観察し配慮しつつ近づくという方法をとることはできない」(竹内 2013b:130)があると述べている。他にも、人と人とのコミュニケーションの原型としてよく言われる「ふれあい」ということに広げても、わたしにとっては、これはまず「じかな」からだのふれあいであって、人と人が距離をおいてことばを投げかけるということではない(竹内 1999:85)といったことが挙げられている。これらを踏まえると、竹内によるふれるという経験の捉え方においては、自己と他者における距離の消去が強調されていることが分かる。

では、上の引用部分に登場する「じか」とは一体何を表しているのだろうか。竹内は「じか」について、「「じか」ということを別の視点から言うと、「距離がなくなる」ということです」(竹内 2009:62)と述べておりその具体例について以下の例を挙げている。

子どもがつかずいてよろっとする。「危ない！」と叫びますね。「危ない！」と言った瞬間に、わたしは思わず手をさし伸べている。そこ、子どものところにいるわけです。そういう意味で、自然科学的な均質空間での距離ではなくて、縦の関係ですね。相手との隔たりというか、奥行きというか、関係の中の距離と言ってもいいのですが、これは全く変動する。(竹内 2009:62)

上記の例³⁾において竹内が語るように、私たちは他者が危険な出来事に見舞われる瞬間、あるいはその真ただ中において、「目の前の他者を助けるべきか」、「助けることによって自分にとって甚大な被害をもたらすのではないか」といった見通しを立てる以前にからだが動いてしまうことがある。このような経験において、日常生活における自己と他者の距離感覚は変容し、自己が転げそうになった際の咄嗟に手をつくかのように他者へとからだは吸い寄せられる。しかし、このような経験は主体である自己を危険にさらす可能性が高い。それにも関わらず、私たちは竹内のように「じか」や「ふれる」という経験に惹かれて止まない。その理由として、社会学者の真木悠介(以下、真木とする)による“Ecstasy”の概念が手がかりとなるだろう。真木は、「Ecstasyは、個の「魂」(あるいは「自己」とよばれる経験の核の部分が)、このように個の身体の外部にさまよい出るということ、脱・個体化されてあるということである」(真木 2012:142)とし、その具体例について「相当に「利己的」であることを自負する人間でさえ、ほほえんでいる幼児に対しては、つい「愛他的」な感情の動いてしまうことを抑制することができない」(真木 2012:133)ことを挙げ以下のように語る。

個体が個体にはたらきかける仕方の究極は誘惑である。他者に歓びを与えることである。われわれの経験することのできる生の歓喜は、性であれ、子供の「かわいさ」であれ、花の彩色、森の喧騒に包囲されてあることであれ、いつも他者から〈作用されてあること〉の歓びである。つまり何ほどかは主体でなくなり、何ほどかは自己でなくなることである。(真木 2012:141)

真木の“Ecstasy”の概念と竹内におけるふれるという経験やじかというあり方を比較してみると、その共通性が明らかとなる。それは、両者ともに自己でなくなるという忘我の経験であり、この経験においては自己と他者における距離の感覚が失われるということである。しかし、自己でなくなるということ、他者からの呼びかけに応答するという出来事は、生の歓喜とともに時に危険性を伴う。次節ではじかであること、ふれることの危険性について考察していく。

5 じかにふれることの危険性

竹内は、ふれることの要件として「感じるままにからだ動き出すことなくして、人は率直にジカに他者とふれあい心を通じることにはできないし、創造の仕事など始まりようがない」(竹内 2013b:193)と述べている。そして、感じるままにからだ動き出す例として、「うまそうなものが目に入ったとたん「手が出る」。子どもがころびそうになったとたんに「手が出」て抱きとめる」(竹内 2013b:192)を挙げている。竹内が挙げる例以外には、音楽家集団の即興セッションや、スポーツの試合における仲間との連携や敵との応酬などにおいて見出すことが可能である。前節において考察してきたように、これらのふれるという経験において、日常生活における安定した距離感覚は揺さぶられ、自己は目の前で引き起こされている事象へと否応なく吸い寄せられる。

ここで注意しておきたいことは、感じたままにからだ動き出す、つまり他者にふれるという経験は、転びそうな子どもを咄嗟に助けるといった向社会的な行動に限られないということだ。それは、「カッして思わず手が出してしまった」という耳馴染みのある文言において端的に象徴されている。私たちの幼少期を振り返ってみても、他者の行動や言動に憤り、我を忘れて手をだしてしまったという経験は多くの人々において身に覚えがあると思われる。仮に、私たちの生活がふれることで満たされたとするならば、道を歩いていて気になった人がいると近寄って抱きしめ、何となく気に入らない人がいると突き飛ばすといったことが頻出するだろう。つまり、私たちが日常生活を滞りなく営んでいくためには、ふれるという経験のみに傾斜してはならないのだ。

また、ふれることは自己と他者における差異を溶解し、何らかの共同体へと自らを埋没させるという行為につながることもある。鷺田は人間の「歌う」という行為が持つ特徴について、以下のよう

歌うこと、それはわたしが別のだれかに、ある意味内容をもったメッセージとか情報を伝えることではない。〈わたし〉という人称のなかに閉じこもったふたりが向き合うことではない。それは、わたし、あなた、かれといった人称の境界をいわば溶かせるようなかたちで、複数の〈いのち〉の核が共振する現象ともいえるべきものだ(鷺田 1999:124)

鷺田は、歌うことの具体的な場面として、追われる者たちの抵抗の場面やお経や御詠歌などの死者を弔う場面と共に、ファシズムという集団的な熱狂状態を挙げている。(鷺田 1999:124) 鷺田の例を踏まえると、歌うことは、軍歌に代表されるように自己を集団的な熱狂状態へと埋没させていく手段として使われることがある。ナチズム研究で有名な社会心理学者であるエーリヒ・フロム(以下、フロムとする)は、「他人との共棲的な関係にはいろいろとする衝動へかりたてられるのは、自己自身の孤独感に抵抗できないからである」(フロム 1951:176)と述べる。ここで使われている「共棲(symbiosis)」とは、フロムによると「自己を他人と(あるいはかれの外側のどのような力とでも)、おたがいに自己自身の統一性を失い、おたがいに完全に依存しあうように、一体化することを意味する」(フロム 1951:176)ことである。ふれるという経験は、自己が他の人々とは異なる存在であることを自ら放棄し、熱狂的な共棲状態に入っていくという現象へとつながる恐れがあるのだ。

ここまでの考察を踏まえると、じかにふれるという経験においては、「[他者]は完結し、凍結して入りこむことのできぬ世界であり、不可触の存在である」(竹内 2013a:130)という竹内自身が主張している他者における他性が蔑ろにされる恐れがあることが明らかとなる。哲学者の森有正が「セクシュアル」というあり方について「人間の全感覚がそれに向かって注ぎかかってゆくような」(森 1970:51)感覚であり、かつ「ある対象と、性欲という観念によってしか表せないような情意のかけをおびた関係に入るといことです」(森 1970:51)と述べていることを踏まえ、竹内は以下のように述べている。

このように自分の全存在がその相手とつながってゆくような、この、なまなましい、激しい、直接的な対象の「所有」こそが、(性行為をも含めて)青年のからだが渴望している他者へのふれ方であり、生を充溢させ、生きることの根底を形成する最も激しい情熱であり、からだに深い統一をもたらす主体としてのからだを獲得する出発点なのだ(竹内 2013b:182)

しかし、他者は果たして自己にとって「所有」し切れる存在なのであろうか。むしろ所有したいという願いからどこまでもすり抜けていく存在であることが、他者を他者たらしめるのではないだろうか。次節では、じかにふれることを目指すのではなく、距離を通じて他者にふれるということの可能性について考察する。

6 距離を保ちつつふれるということ

本節では、これまでの議論を踏まえて、他者にふれるという経験の意味について再考していく。まず、他者という存在が持つ特質について鷺田の「ヘテロロジー」に関する議論⁴⁾を手がかりに探っていく。鷺田は、他者を主題化するときに発生する問題を「〈共存〉の視点」と「〈他性〉の視点」という二つの位相に分ける。鷺田によると、前者の〈共存〉の視点は、「他者の存在を自他の交通関係のなかで規定していく」(鷺田 1997:8)ものであり、後者の〈他性〉の視点は「自他の交通不可能性において不可能性そのものを〈他〉という観念とともに主題化しようとするものである」(鷺田 1997:8)という。以下、この二つの視点を手がかりに、小論において展開してきたふれることに関する考察の内容と照応させていく。

まず、竹内のことばが劈かれるという体験を〈共存〉の視点から捉え直してみたい。竹内は、ことばが劈かれるという体験について「存在がじかに現われた、生の相手に触れた、まざまざと他者に出会った」(竹内 2013a:249)と語っていた。ここで登場する他者は、「自己の存在の確証を支える」(鷺田 1997:15) 存在としての他者、つまり〈共存〉の視点から捉えられた他者である。鷺田は、「〈わたし〉は〈他との〉関係のなかで、〈他者〉といわば相互補完的に生まれてくる」(鷺田 1997:12) ことを根拠に、自己は「他者の他者」としての自己」(鷺田 1997:14) であると其の成立過程から説明している。このような〈共存〉の視点から捉えた他者を受容するためには、三節にて取り扱った共生態としてのからだというあり方が必要になってくる。他者からの呼びかけに共生態としてのからだで応答することにより、他者の他者としての自己は成立するのである。

しかし、鷺田によると、〈共存〉の視点による他者の捉え方には、「コンセンサスを他者理解の一義的なモデルとすることにつうじ、差異の確認という他者理解のもっとも特異な点を逸することになる」(鷺田 1997:10) という批判があるという。この批判は、五節にて取り上げたふれるという経験が持つ危険性と対応している。自己と他者における差異の溶解というフロムが述べる共棲(symbiosis)の状態は、まさに上記の〈共存〉の視点への批判が当てはまるだろう。

次に〈他性〉の視点からふれるという経験を捉えていく。鷺田は、〈他性〉の視点について「他者のまったき他者としてのあり方が〈他性〉として主題化される。理解可能なもうひとり別の存在(der Andere)ではなくて、理解不能のまったき異他的な存在(der Fremde)が問題になる」(鷺田 1997:10)と述べ、「要するにここでは自他の架橋不可能な断絶こそが前面に出てきており、コミュニケーションではなくて、徹底した異和、関係が起こりえないことそのことのうちで自と他が問題とされる」(鷺田 1997:10)と其の特質について明らかにしている。

鷺田は、このような自他の架橋不可能な〈他性〉の例として、「自分が向き合っているこの世界から、リアリティというものがそっくり脱落してしまっ、絵はがきか写真を見ているような非現実感しか感じられないという体験がある。病理的なまでに高じたとき、それはしばしば離人症の症例として扱われる」(鷺田 1997:22-23)という離人症の体験を挙げている。ここで挙げられている例は、一節にて取り上げた他者にふれられないという状態と対応していることが分かる。まとめると〈他性〉の視点は、自己と他者の差異を明確化することによって他者の他性を保持する。その一方でこの視点が前面化すると、自己はふれるという経験一般から疎外され世界のリアリティを喪失し離人症へと陥る可能性がある。

鷺田は、〈共存〉の視点と〈他性〉の視点という二つの視点の特徴を踏まえ、「〈他〉という契機を〈自〉の「内部」へと併合してはならないが、逆に、〈他〉という契機を〈自〉の「外部」として純粋化してもならない」(鷺田 1997:30)と述べる。なぜなら、〈他〉を〈自〉の絶対的な外部に位置付けることは、「分割と抱合——同化=自己固有化(Aneignung, appropriation)——の思考」(鷺田 1997:30)であり、他者を「自分のものとして横領する」(鷺田 1997:26)という同化の思考に他ならないからである。つまり、他者を不可触な存在であると措定することは、逆説的にその〈他性〉を覆い隠してしまうことにつながるのだ。そのため、〈共存〉の視点と〈他性〉の視点を二律背反するものと捉えてしまってはならない。このどちらか片方に傾斜することは、他者の他者性の喪失という事態を引き起こしてしまう。では、〈共存〉の視点、〈他性〉の視点という両者の特質を踏まえ、自己が他者にふれるためにはどのような視点が必要となってくるのだろうか。小論は、そのような視点を、自己と他者の関係においてゼロ距離であることを理想化せず、他者が自分とは異なった存在であるこ

とを踏まえつつ、一定の距離を保ちながら他者にふれるという視点であると考え。

鷺田は、自己が他者とのゼロ距離を目指す理由について「他者にとって意味のある存在としての自己、つまりは他者の他者としての自己を経験できないとき、ひとはどうするか。たとえば、過剰に他者に接近しようとすることがある」（鷺田 1997:14）と述べている。つまり、他者の他者としての自己を経験できないことが、ふれるという経験への強い動機付けとなるのだ。また、社会学者の作田啓一（以下、作田とする）は、現代人がふれ合いに惹きつけられる原因として、未知の人々との接触の機会が増えることによって相手を不安にさせない隔離（プライバシー）という消極的なモラルが発達してきたことを挙げており、この隔離によって心と心の触れあいの希求が強まるという考察をしている。（作田・多田 1975:157）

作田が指摘する現代人の持つふれることへの両価的な感覚は、私たちにとって非常に身近なものである。例えば、別段用事があるわけではないにも関わらず、バスや電車でたまたま席が隣になった人へと話しかけることに私たちの多くは心的抵抗を感じる。多くの現代人は、見知らぬ他者に話しかけることや話しかけられることに関して、何かしらの戸惑いや抵抗を感じることが多い。その一方で、誰かに自分のことを分かって欲しい、他者と親密な関係性を築きたいという思いにも駆られる。このような思いは、ややもすると自他の差異を消失させることが目的と化してしまう可能性を有している。

社会学者の菅野仁（以下、菅野とする）は、「距離がゼロという「溶解集団」的な人間関係は、たとえ親密な関係においても理想状態として想定することはできない。というよりも理想状態として想定すること自体が大きな危険をはらんでいる」（菅野 2003:153-154）と自他関係においてゼロ距離を理想化することの危険性について指摘し、以下のような発想の転換を提唱する。

〈私のすべてを受け入れ、すべてを理解してくれる他者〉なんてどこにもいないことをしっかり自覚して、適度な距離があり、お互いの「秘密」を前提とした人間関係においてこそ互いを慮ったり、想像力を働かせることで〈相互の関係を深く味わう〉ような親密な社会関係の形成が可能になるといった発想の転換が必要なのだ。（菅野 2003:154）

菅野の主張を小論の考察と関わらせるならば、すべてを理解してくれる他者がいないという自覚は、自他は完全にはふれあうことが出来ないことの自覚だと言えるだろう。そして、適度な距離を保つためには、三節で登場した「制度としての世間のことば」が重要になってくる。竹内は、制度としての世間のことばについて、否定的な意味合いを込めて「他人と距離をおき、自分が傷つかないようにかくすためのことば」（竹内 2009:117）であると語っていた。

確かに、制度としての世間のことばの存在は、自他関係においてガラスの壁のような精神的な隔たりを生じさせることにつながる恐れがある。しかし一方で、他者との適切な距離を保ち、自他の差異に丁寧に目を注ぐことが可能になる。読み手や聞き手、場面や状況によって複雑にその文体を変化させるという特質を有する敬語表現などは、他者との適切な距離感覚を探ろうとする細やかな配慮の中で、他者へとふれていこうとする試みの優れた一例であると言えるだろう。

他者の他者としての自己が経験できないとき、自己は他者との間に生じた隔たりを何とかしようと躍起になる。このような自他の断絶ともいえる状況のなかで、自他のゼロ距離が理想的なあり方として想起される。しかし、ゼロ距離への熱望は、その期待の高さによって却ってふれるという経

験から自己を疎外してしまうことにつながる。また仮に、ゼロ距離という状態が成立したとしても、自他の差異を溶解するという特質により他者の持つ〈他性〉が見逃される恐れがある。その具体例は、小論の冒頭に挙げた一方はふれている、ふれあっているという確かな実感を抱いているのに対して、他方は明らかにふれていない、ふれあっていないと思っているという恋人の例からも明らかである。ふれることをめぐるこうした困難に直面する中で、私たちは、自己と他者における否応のない差異や距離を痛感しつつも、それでもなお他者にふれていくことをやめないだろう。完全な同化や異化へと傾斜することなく粘り強く他者へと臨むことによってこそ、私たちはふれるという経験の有り難さを深く感受することができると思われるからだ。

おわりに

小論では、自己と他者がふれ合うという経験の成立し難さに焦点を当て、竹内の思想を手掛かりに、ふれるという経験の具体的な姿を浮かび上がらせた。この作業を通じて、ふれるという経験が有する特質と危険性について明らかにし、他者へふれることの意味について考察してきた。その結果、自己は、ふれるという経験に傾斜してはならないこと、及び全面的に身を退いてはならないことが明らかとなった。

まず、ふれるという経験への傾斜は、自己と他者の差異の消失につながる。それは、からだがかたくまに行動することによって他者へ危害を加えるといった形で現れることや、フロムの共棲状態のように集団へと埋没するといった形で現れることがある。真木の“Ecstasy”という概念に倣うならば、自他の関係における差異の溶解は、自己にとって心地のよさを感じる状態であるとも言えよう。しかし、このような経験では、自己とは異なる存在としての他者の〈他性〉が蔑ろにされる。

一方で、ふれるという経験から全面的に身を退くことは、離人症に近い状態へと自己を追い込んでいくことにつながる。そこでは、自己と他者は断絶しており、この断絶によって自己の生は貧しいものとなっていく。このように他者との断絶状態によって、他者の他者として自己を感じる事ができない場合、自己は他者へと過度に接近しようと試みることがある。自他のゼロ距離を理想化するという心性には、自己にとって〈共存〉としての他者が不在であることが明らかとなる。注意しておきたいことは、〈他性〉を純粹な外部へと設定することも、他者を同化するということが他ならないということである。それゆえ、ここでもまた他者の〈他性〉が蔑ろにされ、ふれるという経験への傾斜とは違った形での自己の喪失へとつながる。

小論は、ふれるという経験が有する両面性を踏まえ、自他関係においてゼロ距離を理想化することなく、他者に完全にはふれることはできないことを念頭に置きつつ、それでも他者にふれようと試みようとするを結論に据えた。それは、〈他性〉を保持しながら、他者にふれることを試みていくことと言いかえうるだろう。最後に、このような姿勢で他者にふれていくというあり方の一つの展望を以下に示す。

竹内は、「人が人に「ふれている」か「ふれていない」かは二つに一つで、漸次的に接近する中間項は全くない」(竹内 1999:102) と述べ、「この二つは、間に決定的な裂け目がある異質な次元」(竹内 1999:102) であると語る。しかし、私たちが身近な他者にふれるという経験を丁寧に振り返ってみると、「ふれている」と「ふれていない」という経験が共に現出している瞬間があるのではないだろう

か。

恋人とともに歩いているとき、私たちはその手を取り、にぎり、そしてつなぐ。自らの手のひらに恋人の手のひらの温度が伝わってくるその瞬間、私たちは相手と確かにふれ合っていると感じる。しかし、ふれた手のひらは、つないだ以上はいつか離さなければならない。この至極当たり前である事実は、どれだけふれ合ってもふれ合い切れない、完全に同化することができないという〈他性〉の端的な現われである。だが、この事実があることによって、私たちは「どうせ離れる」と手をつなぐことを中絶するだろうか。むしろそうであるが故に一層、相手にふれたいという思いに駆られるのではないだろうか。このような「ふれている」と「ふれていない」のあいにおいて、私たちは他者とのゼロ距離と圧倒的な隔たりの両方を受取る。この瞬間、自己は、ふれられないことにふれることによって、いま目の前で、確かに、共に、生きている他者の存在を深く感じ取ることができるだろう。自己が他者にふれることの意味としてこのような展望を示し小論を終える。

注

- 1) 『DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引』にて、離人症 (depersonalization) は、「解離症群 / 解離性障害群」の「離人感・現実感消失症 / 離人感・現実感消失障害」という項目に分類されているが、小論では、竹内が診断された年代と彼の著作における表現を考慮し、「離人症」という表現を用いる。精神科医であり精神病理学者の木村敏は、離人症の特徴について、「この症状においては外界の事物や自分自身の身体についての実在感や現実感、充実感、重量感、自己所属感などといった感覚が失われるだけではなく、なによりもまず自分自身の自己がなくなってしまった、あるいは以前とすっかり違ってしまった、感情や性格が失われてしまったという切実な体験が訴えられるためである」(木村 1982:26) と述べている。
- 2) また、別の個所では「わたしのからだの延長としての相手。その相手の働きかけてくる動き、すなわち相手のからだの延長としてのわたしのからだ。これをわたしは共生態と名付けたい」(竹内 2009:103) となっており「共生態」という縮めた表現もなされている。
- 3) 竹内は、「じか」という状態の具体例として他に、生後六か月の娘を自身の腹の上に乗せている時に生じた以下のような出来事を挙げている。「わたしの娘ゆいが、生まれてまだ六か月くらいの頃、わたしはゆいをおなかののせたままうとうとしていた。うつ伏せになったゆいはすやすや眠ったままわたしが息するたびにわたしのおなかの上でゆっくり上下している。——突然わたしはぐいと衝き動かされた気がして目が覚めた。赤んぼがまっすぐわたしを見ている。手とも言えないような小っちゃな二本を懸命に突っばって「あー あー」と叫ぶ。その声はずしんとわたしを打った。「この子、話しかけてる！」あわてたわたしがなんと答えたか、まったく覚えがない。おっぱいがほしい！ でもない、お尻がぬれている！ でもない。ただまっすぐ呼びかけている。ことば以前の声で。「じか」ということばを思うとき、真っ先にわたしのからだにうずいてくるのは、この時のゆいの目、声、突っばる手のゆらぎだ」(竹内 2009:16-17) 「じか」という状態の例として、どちらも子どもを前にした際の出来事が挙げられている点は興味深いが、小論の本旨からは逸れるので深くは立ち入らない。
- 4) 以下は鷺田によるヘテロロジーの説明である。「他なるもの、異なるもの、なじみのないもの、違和感のあるもの。そのように言われるときの、その〈他〉もしくは〈異〉という存在の様相について考える作業を、生体内の不協和を意味する医学用語を転用して、ヘテロ (異・他) の研究として「ヘテロロジー」と呼ぶことにしよう」(鷺田 1997:5)

【参考文献】

- マルティン・ブーバー (植田重雄訳) (1979) 『我と汝・対話』 岩波書店
 エーリッヒ・フロム (日高六郎訳) (1951) 『自由からの逃走』 東京創元社
 ロナルド・D・レイン (天野衛訳) (2017) 『引き裂かれた自己』 筑摩書房
 市川浩 (1984) 『〈身〉の構造』 青土社
 菅野仁 (2003) 『ジンメル・つながりの哲学』 NHK 出版

- 木村敏（1982）『時間と自己』中央公論社
- 坂部恵（1983）『「ふれる」ことの哲学—人称的世界とその根底』岩波書店
- 作田啓一・多田道太郎（1975）『動詞人間学』講談社
- 竹内敏晴（1990）『「からだ」と「ことば」のレッスン』講談社
- 竹内敏晴（1999）『癒える力』晶文社
- 竹内敏晴（2009）『「出会う」ということ』藤原書店
- 竹内敏晴（2013a）『セレクション・竹内敏晴の「からだと思想」1 主体としての「からだ」』藤原書店
- 竹内敏晴（2013b）『セレクション・竹内敏晴の「からだと思想」2 「したくない」という自由』藤原書店
- 竹内敏晴（2014a）『セレクション・竹内敏晴の「からだと思想」3 「出会う」ことと「生きる」こと』藤原書店
- 竹内敏晴（2014b）『セレクション・竹内敏晴の「からだと思想」4 「じか」の思想』藤原書店
- 田中智志（2004）「ケアリングの存在条件 機能的分化のなかで」臨床教育人間学会編『他者に臨む知』世織書房
- 鳶野克己（2012）「「生きることのかなしみ」という力 —かなしみの教育人間学に向けて—」田中每実編『教育人間学 —臨床と超越—』東京大学出版会
- 鳶野克己（2017）「「生きることのかなしみ」再考」教育哲学会『教育哲学研究 第115号』相模書房誠公社
- 中井久夫（1995）『家族の深淵』精興社
- 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編（2001）『日本国語大辞典 第二版 第十一巻』小学館
- 日本精神神経学会監修（高橋三郎・大野裕・染矢俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村將・村井俊哉訳）（2014）『DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引』医学書院
- 真木悠介（2012）『真木悠介著作集Ⅲ 自我の起原』岩波書店
- 森有正（1970）『生きることと考えること』講談社
- 鷺田清一（1996）『じぶん・この不思議な存在』講談社
- 鷺田清一（1997）「他者という形象——《ヘテロロジー》素描」実存思想協会『実存思想論集Ⅻ 第二期第四号 『他者』』世田印刷
- 鷺田清一（1999）『「聴く」ことの手引—臨床哲学試論』阪急コミュニケーションズ

（本学大学院 博士前期課程 教育人間学専修 修了生）